

Title	<文献紹介> ME書誌編集委員会編マルクス = エンゲルス 邦訳文献目録(暫定版)
Author(s)	細川, 元雄
Citation	経済資料研究 (1975), 9: 49-56
Issue Date	1975-04-15
URL	http://hdl.handle.net/2433/79690
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

文献紹介

ME 書誌編集委員会編

マルクス＝エンゲルス邦訳文献目録

(暫定版)

1973年11月刊 80頁

細川元雄^{*}

I

ここで紹介しようとする『マルクス＝エンゲルス邦訳文献目録』は、1974～1975年より英語版マルクス・エンゲルス著作集および新マルクス＝エンゲルス全集（新 MEGA）の刊行を記念して、1973年11月22～24日東京で「マルクス＝エンゲルス著作展示会」^①が開催されたさいの「出品目録」であり、この展示会の中心が「邦訳文献」であることを機会に、「ME 書誌編集委員会」により、本目録が出品以外の文献を含めて「総合的な」ものとして作成された。本目録「はしがき」によれば、ME 書誌編集委員会は、法政大学大原社会問題研究所が戦前刊行の内藤赳夫編『邦訳マルクス＝エンゲルス文献』^②

（以下内藤目録と略称）の補完を計画、準備作業を進められていたが、上記の機会にまとめられるにさいし、マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会同人の村田陽一氏、杉本俊朗氏、土屋保男氏のいずれもわが国 Marxologie の権威の方々の参加をえて組織されたものである。しかも本目録が暫定版であり、「将来は一点ごとに翻訳台本、刊行事情等の解説を付した決定版を準備したい」といわれている^③。

私が非力をかえりみずあえて本欄に紹介しようと思ったのは、文献調査に従事している方々に本目録の存在を広汎に知っていただくことと、私のささやかな調査ではあるが決定版へ寄与できれば幸いと思ったからである。

本目録は、明治以降今日までマルク

^{*} ほそかわ もとを 京都大学経済学部調査資料室

- ① この展示会は、「極東書店、ナウカ、大月書店」の3社がドイツ民主共和国およびソ連邦のマルクス＝レーニン主義研究所、ドイツ民主共和国図書輸出公団、ソ連国際図書公団の協力によって開催されたものである。
- ② 内藤赳夫編、邦訳マルクス＝エンゲルス文献（大原社会問題研究所アルヒーフ No. 3）同人社 昭和5年4月 78ページ
- ③ ME 書誌編集委員会のメンバーである杉本俊朗教授よりの伝聞によれば、現在法政大学大原社会問題研究所が中心になって「決定版」の作業がすすめられている。

ス＝エンゲルスの著作の日本語訳文献が年代順に収録されたA5判、80ページの小冊子である。本書の構成は、「はしがき」、「凡例」、「マルクス／エンゲルス邦訳文献発行年次別数(表)」と目録本体、さらに補遺とからなり、目録本体は、前半(1～33ページ)が1904(明治37)年から1937(昭和12)年までの刊行文献を、後半(34～77ページ)が1945(昭和20)年から1973(昭和48)年までの刊行文献を収録している(以下前者を戦前期、後者を戦後期と略称)。配列形式は各年次ごとに区分され、戦前期のみには最初に当該年の代表的な文献の写真(1点)と社会運動史上の略年表(各年次3～7項目程度)とが付けられている。単行本、パンフレット、編集本、新聞雑誌掲載の邦訳文献が、(1)月日、(2)著者(マルクスはM.と、エンゲルスはE.と略)、翻訳者(筆名は括弧で本名をおこす)、(3)書名(雑誌掲載は論題)、(4)出版社、

(5)判型、(6)頁、(7)刊行当時の定価の順に記載され、刊行年代順の配列は日付にまで徹底し、年次ごとの刊行点数を表わす累計番号が各文献の最後に付されている。本書「発行年次別数(表)」によれば、目録本体に1,183点が収録され、補遺23点を合すると1,206点の大量に及んでいる。最初にアスタリスクが付されている文献は、当日展示会に出品されたもので、その数363点(戦前期203,戦後期、ただし昭和34年まで160)に至っている。しかも今日稀覯本となっているものも多く、この展示会の意義深さを感じさせる。なお戦前期の文献の一部に発禁年月日が付されているが、のちに詳しくふれる。

本目録の特徴は、すでに目録構成で明らかなように、戦前期には写真と年表を加えて「わが国の社会思想史および運動史」を語らせていることである。勿論マルクス＝エンゲルスの著作の正確な理解と普及とをはたす翻訳⁴は、

④ マルクス＝エンゲルスの邦訳に関連した文献は、別に一つの目録を必要とするが、主要なものをあげると(内藤目録を除く)、

1. 向坂逸郎監修、マルクス・エンゲルス著作解題、黄土社 昭24.2
2. 村田陽一、邦訳ME全集・選集とMEGA、「新しいメガ」極東書店 昭48.6に所収『共産党宣言』について
3. 大島清、日本語版「共産党宣言」書誌、櫛田民蔵「共産党宣言」の研究 青木書店 昭45.12に所収
4. 平野義太郎、「共産党宣言」の日本語の嚆矢、社会評論 第5巻第2号 昭23.3
5. 渡辺悦次、「共産党宣言」邦訳物語の一こま、幸徳秋水全集別巻1附録 昭47.10に所収
- 『資本論』について
6. 鈴木鴻一郎、「資本論」と日本、弘文堂 昭34.1
7. 鈴木鴻一郎、《資本論》各国語版解題 日本語版「資本論辞典」 昭41.5
8. 遊部久蔵、「資本論」研究史、第5章第1節、ミネルヴァ書房 覆刻版 昭46.10
9. 土屋保男、「資本論」邦訳をめぐる、経済 第37号 昭42.5
10. 広西元信、資本論の誤訳 青友社 昭41.12

台(底)本となるテキスト自体と第一次資料の刊行状況とからみ合せて、マルクス主義思想の研究史の中に位置づけされなければならない⁵⁾が、本目録が日本マルクス主義史研究の基礎作業の一つである点から偉大なる貢献をはたしている。本目録のもう一つの特徴は、「発行年次別数(表)」によって量的にその盛況を表わしていることである。昭和5年刊行の内藤目録は、「晩近マルクス主義の画時代的发展につれてマルクス＝エンゲルスの著作の翻訳がすばらしい勢で出版せられた結果、これらの利用を遺憾ならしめるためには、別に一箇の文献目録を必要とするにさえ至った」といい、223点を収録している。内藤目録が「1928年末までの文献を収録し、また1919年以前はふくまれていない」ので両者を含め、「1929年以降1937年までに多量の文献が刊行され、さらに戦後1945年か

ら現在まで」収録した本目録は、1,206点に至っている⁶⁾。邦訳文献刊行のゼロ時は、明治44年～大正6年と昭和13～19年とであり、いずれも社会主義運動史上の「暗い谷間」であった。また逆に、量的にピーク時をみると、戦前期では大正9～13年「日本最初のマルクス全集」と昭和3～8年の改造社版全集とあい前後し、戦後期では、昭和24年をさかいとして戦前期の復刻文献から「戦後民主的出版界の最大事業の一つ」である大月書店版選集の刊行を第1期とすれば、昭和34年にはじまり、現在刊行中の全集が第2期となるであろう。このように邦訳全集、選集の刊行状況だけでなく、普及版ともいえるパンフレット、文庫本別の刊行量をみると、私たちは日本マルクス主義文献史の各段階を読むこともできるのではないだろうか。勿論、わが国の時代的要請を含めてのことであるが。以

5) 杉原四郎, マルクス・エンゲルス文献抄, 未来社 昭47.11 参照。なおわが国のマルクス＝エンゲルス研究史文献も別に目録を必要とするが、通観的なものは本誌第1号のレファレンス・ブックスと第6号のそれとで示めされているので省略し、最新のものとして経済学分野では

遊部久蔵, 「資本論」研究史, 前掲 注4

哲学・科学論では

岩崎允胤, 日本マルクス主義哲学史序説 未来社 昭46.1

大沼正則, 日本のマルクス主義科学論, 大月書店 昭49.11

歴史学では

犬丸義一, 日本におけるマルクス主義歴史科学の発達, 「現代歴史学の課題 上」 青木書店 昭46.7 所収

6) 内藤目録223点と本目録1,206点という文献点数は厳密に対比できない。前者はマルクス＝エンゲルスの著作から邦訳をみ、後者は出版刊行からみているため、例えば全集、選集は前者が各論題を一点づつあげているが、後者では一括し一点となっている。また分冊、改訂など前者は一括し、後者は刊行毎に分けている。

7) 村田陽一, 前掲論文(注4の2) 参照

上のごとき本目録の成果から、「わが国社会思想史および運動史上の資料として」さらに編集されなければならないのは、ここに収録された文献の「一点ごとの翻訳台本、刊行事情等の解説」を加えた「決定版」であり、その期待は大きい。

II

図書館員が自からの図書館の利用者になったとき、いつもながらその不備を発見し、その改善に役立たせているのだが、古い伝統をもつ図書館ほど苛立ちと諦めを感じずにはいられない。

本目録の編集にご努力された杉本俊朗教授から本書を賜わり、私たちの学部図書室で所蔵調査をはじめたとき、戦前期にパンフレット、文庫本が整理、保管をされなかったこと、発禁本の別置、戦中の疎開などの事情と雑誌の欠号にあい、十分な調査が果たせていない。とりあえず、本目録の決定版へは次の文献を追加していただきたい。

1908（明治41）年10月1日 E. 高
畠素之、宗教改革の経済的説明
《東北評論》3 ⑧〔復刻昭37.7.23〕

1920（大正9）年8月1日 M. 櫛

田民蔵、恐慌と資本家経済（1）
《我等》2—8 50～61^⑨

1926（大正15・昭和元）年10月1日
M. 中川善之助、呉越の弁（1849
年4月8日ケルンの陪審法廷に於
ける弁論）《社会科学》2—8
427～446^⑩

1929（昭和4）年11月1日 E. 向
坂逸郎、農業問題について（ルド
ルフ・マイエル宛）《新興科学
の旗のもとに》2—11 89～93

1947（昭和22）年11月1日 M., E.
田村実、ヘーゲル哲学と弁証法
関書院 新書 68 181^⑪

11月15日 E. 岡
崎次郎、カウツキーあてのエンゲ
ルスの手紙〔9通〕《唯物史観》
1

1948（昭和23）年4月15日 E. 岡
崎次郎、カウツキーあてのエンゲ
ルスの手紙〔12通〕《唯物史観》
2 100～111

9月30日 E. 岡
崎次郎、カウツキーあてのエンゲ
ルスの手紙〔18通〕《唯物史観》
3

12月25日 E. 佐

⑧ エンゲルスの『『空想から科学への社会主義の発展』英語版への序文』（1892）より

⑨ 「資本論」第3巻第3章第15節の邦訳、内藤目録（61ページ）に収録されている。

⑩ 内藤目録（22ページ）に収録されている。

⑪ 「マルクス及びエンゲルスの諸著作のうちから、ヘーゲル哲学及びその弁証法に関する諸論説を選んで、翻訳編集した」という「マルクス・エンゲルス選集」で、「反デュリング論」の序説1、「フォイエルバッハ論」1～3、「ヘーゲル法哲学批判」「哲学の貧困」第2章第1節、「資本論」第1巻の第2版跋文、「経済学批判」の序文からという短かい8篇を収めている。

藤進, マルクスと「新ライン新聞」
《唯物史観》 4 135~138

E. 佐

藤進, パリの六月戦争 《同》
4 139~142

M. 佐

藤進, パリ・プロレタリアートの
六月戦争 《同》 4 143~145

M. 佐

藤進, 1849年の新年 《同》 4
145~146

E. 佐

藤進, 帝国憲法戦役 《同》 4
146~147

1954 (昭和29) 年6月20日 M. 長
州一二, 重農主義論, 伊坂市助・
越村信三郎監訳『スピーゲル編
経済学の黎明』 153~166

1968 (昭和43) 年11月1日 M. 田
中真晴, マルクスの書簡について
(マルクスからグレート・ヤーマ
ウスのエンゲルスへ, 1882年8月
24日) 《経済論叢》 102—5
128~130

なお, 杉本教授より賜った本目録
の「訂正版」には,

1922 (大正11) 年5月31日 E. 福
田徳三, 共産主義綱領(『共産党宣
言』の一草稿たるエンゲルス稿『共
産主義綱領』のうち) 《商学研究》
2—1 353~358

1948 (昭和23) 年4月10日 M. 宮
川実, 賃労働と資本 (日文英文対
訳) 研進社 B6 84 60

1956 (昭和13) 年5月1日 M. 村
田陽一, 賃労働と資本 国民文庫
社

以上3点が追加記入されている。

また本目録には印刷事情によって,
数多くの誤植があるが, 杉本教授の「訂
正版」にはすでに赤字で訂正され, 本
欄をかりて指摘するまでもなく, 決定
版に訂正されるのでここでは省略する。

III

つぎに「決定版」への注文として
「暫定版」の目録上の2, 3の問題点
にふれておこう。まず内藤目録は「目
録中に収録したのはマルクス=エンゲ
ルスの原著を翻訳した独立の単行本,
編纂本, 小冊子, 新聞雑誌所載論文の
みに限られ, 従って他の著者が自らの
著作中に引用しているマルクス=エン
ゲルスの翻訳は——よし長いものでも
——すべて之を除外した」(凡例)と
明確に翻訳引用と翻訳文献を区分して
いる。戦前期の研究水準, 発表形式な
どの事情はあるが, 雑誌論文にはとく
にこの区分を厳密にして欲しい。まず
第一に内藤目録にも収録されている大
正15・昭和元年の西雅雄『資本論』
最初の構想——『資本論』に関するマ
ルクスの手紙』は, 『マルクス主義』
誌に「……構想」として2回, 『経済
学批判』の完成」として1回, 『経済
学批判』の批判」として3回, いずれ
も「……マルクスの手紙」として一連
番号を付し, 計6回連載されたもので

あり、内容はマルクスの手紙によって『資本論』に至る事情を解説した論文とも解せられる。それゆえ翻訳文献としては、同論文中にエンゲルスの「カール・マルクス著『経済学批判』〔書評〕」が『『経済学批判』に対するエンゲルスの評論』として全訳されており、これを採録すべきではないだろうか。つぎに内藤目録を踏襲された本目録には、翻訳引用と思われる文献が収録されている。それは大正8年の河上肇「マルクスの社会主義の理論的体系(3)」(社会問題研究3、のち大正10年「唯物史観の公式」として『唯物史観研究』に所収)および昭和7年の向坂逸郎「マルクス・エンゲルス『ゲーテに就て』」(改造14—12)である。前者について私の疑問を述べれば、河上肇は本文で『経済学批判』の序文、いわゆる唯物史観の公式といわれる箇所の原文と翻訳とを掲載している。その際に「以下引用する所の一節は、従来余が屢々訳出せし所なれども」といい、「経済論叢第8巻第1号(大正8年1月)の拙稿『生産政策としての社会主義』……筆者」に載す所の訳文は原文に忠実ならざるだけ日本語としては却て理解し易かるべしと思ふ」と注記している。「序文」の最初の翻訳としては経済論叢の論文が挙げられるであろうが、目録収録上の翻訳文献として

は疑問が残る。

つぎに、『資本論』の最初の解説書といわれるモスト(Most, Johann Joseph, 1846–1906)の『資本と労働』(Kapital und Arbeit. Ein populärer Auszug aus „Das Kapital“ von Karl Marx. [1873], Zweite verbesserte Auflage, 1876)が、昭和2年に嘉治隆一によって「社会思想」誌および「我等」誌¹²に「マルクス・モスト 共編『資本論略解』」として翻訳連載され、本目録に収録されている。もともとモストの本書改訂版はマルクスが手を加えたものであるが、マルクスはゾルゲ宛の手紙(1876年6月14日)で「僕は改善の筆をくわえたモストの本を同便で送る。僕の名まえはださなかった。名まえをだすとなると、もっとたくさん直さなければならぬだろうからだ(価値、貨幣、労賃、その他多くの問題で、僕は全文を没にして、自分の文章でおきかえなければならなかった)。」(マルクス=エンゲルス全集第34巻大月書店148～149ページ)といい、エンゲルスものちにモストの書にふれ、「この改訂版とでさえマルクスの名まえをけって関連づけられないという明確な条件つきで、はじめて彼の訂正を取りいれるのを許した」(「カール・マルクスの死によせて」、全集第19巻大月書店342ページ)と述べている¹³。そ

12) モストの書を収録している本目録には、「マルクス・モスト 嘉治隆一訳、資本家的人口法則」として『我等』誌掲載(第9巻第10号、昭和2年12月1日刊 48～55ページ)は未収録である。

れゆえモストの書は本目録の対象外であろう。

最後に、本目録が「早急に作業を進め、印刷原稿をまとめる必要が生じた」（はしがき）といわれる編集の時間的制約と印刷事情の悪条件に遭遇されたと思われるが、目録技術上の欠点にふれておこう。

(1)論題の不統一 全集、選集は「一括配列をせず発行順」にそのつど収録されているが、全集名、選集名がメイン・タイトルになったり、括弧つきのサブ・タイトルになったり不統一が目についた。とくに戦後期、昭和24年にはじまる大月書店版選集は、昭和25年まで選集名をメイン・タイトルとし、昭和26年以降をサブ・タイトルとしている。

(2)継続論文の順序数表示 雑誌連載の場合も一括配列せずそのたびに発行順に収録されているため、論題あとの順序数には注意をはらって欲しい。とくに大正15・昭和元年に「我等」誌上で連載される大内兵衛訳の文献は「ニューヨークトリビューンより」を「イギリス通信(1)……」にかえ、継続を表わしてはどうか。

(3)ページ数表示 単行本の前付ページ、本文ページ、後付ページが合算されたり、本文ページのみであったりしている。

なお、本目録の発禁年月日の記載にふれておこう。発禁とは、周知のごとく「一般に発売頒布禁止を意味するが、実際は出版法による出版差止、新聞紙法による発行差止、新聞記事の掲載差止、削除処分をも含めて考えられるべきで、この処分に安寧禁止と風俗禁止の二種があった」¹⁴。マルクス＝エンゲルス邦訳文献を含む戦前期の「左翼出版物」は安寧禁止の対象となり、その数は「大正末に二、三百台」から「昭和7年には五千台を越えた」¹⁵といわれている程大量であり、今日その文献を確認することは困難である。

『昭和書籍・雑誌・新聞発禁年表』によって、本目録の文献に新たに17点の追加記入ができた。しかしわが国の出版弾圧の歴史¹⁶は、「奴隷のこことば」から〇〇や××の「伏字」にはじまり、出版社の「自発的増刷の中止」、当局の威嚇的勧告による「発売停止」、「絶版」にとあい、戦前期の本目録収録の文献のすべてが対象になったのではな

13) モストについては、嘉治隆一、ヨハン・モスト評伝、『我等』第10巻第4～5号、昭和3年4～5月、最新では、杉原四郎、前掲書 267～269ページ参照。

14) 福岡井吉、所謂「出版警察」について、小田切秀雄、福岡井吉「昭和書籍・雑誌・新聞発禁年表(中)」より、同書は上・中・下(1～2)からなり、明治文献 昭和40～42年刊。

15) 福岡井吉、前掲論文。

16) 前掲注14の発禁年表のほか、畑中繁雄、覚書昭和出版弾圧小史、図書新聞社 昭和40年8月参照。

いかとさえ思われる。伝聞によれば、個人のおおびらな所持が憚れ、図書館においてまでこの種の文献が「発禁」ラベルをはって、別置保管されたという歴史の一コマがあった。

おわるにあたって「マルクス・ルネッサンス」といわれる今日の研究動向、

さらにマルクス経済学の学史的アプローチの深化、発展のなかで、私が目録編集という同質の作業にたずさわっていることで、つい欠点をあげつらい、本目録のもつ意義を見失ってはいないかと心配している。

(本書は極東書店にて実費頒布されている)

洋書 専門

小人数で、きめこまかいサービスと、事務処理の迅速・正確をモットーとしております。

内外図書(株)

〒101 東京都千代田区西神田2丁目4番地7号 福島ビル
電話 東京 (03) 239-3554(代) 振替 東京 98189